



アンダー・ザ・ウィーピング・ウィロー

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

| | |
|----|----|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
| 5 | 6 |
| 7 | 8 |
| 9 | 10 |
| 11 | 12 |
| 13 | 14 |

★タップすれば各章へジャンプします

1

真っ白な原稿用紙を前にして、私は先刻から一時間近くも迷っていました。

ペンを持っては置き、また手に取り、原稿用紙の一

ます目にペン先を降ろしては、そこでまた手をとめ、
：
：
：。

はたしてこんな手記を書くことになんの意味がある
のか。書き始めた今でもまだ、その問いに対する答え
を見つけ出せないでいます。

たぶん私は、この手記を誰かに読んでもらうために
書いているのではありません。強いて言うなら、三十
年後の自分に向かって書いているのでしよう。

そのころ私は、今の母と同じ年格好になっているはずです。この二階の窓から中庭越しに見える縁側で、春の陽を浴びてうとうととしている母は、現在五八歳。まだ完全に老け込む年ではありません。でも、父が死んで以来、あんなふうに庭のしだれ柳を見ながら眠りこんでしまうことが多くなりました。

私とその歳になって、自分の選んだ道を後悔していないという保証はどこにもありません。もしかしたら、

人生を悔やみ、自分を責めていることだってあるかも知れないのです。

そんな時、この手記を読み返して、少なくとも私の人生の道程にはこんなにも満ち足りた時期があったのだということ、かみしめたいと思うのです。

母の住む母屋とこの離れとでコの字型に囲まれた中庭の、あと一面はメツキ工場の塀。そこから漂ってくる鼻をつく薬品の臭いすら、私には幸福の象徴に感じ

られます。それほど、今の私は至上の幸せの中にいるのです。

でも、この幸せは、人様から見たら、けっして尋常なものではないでしょう。

たとえば、このペンを持つ指先。

その爪には、今、パールピンクのマニキュアが塗られています。ブレスレット型の腕時計が見え隠れするレモンイエローのブラウスの袖はブラウジングされ、

胸元にはリボンタイが揺れています。スカートはウール地のチェツクのみデイ。そこから肌色のストツキングに包まれた脚が伸びています。そしてそんなふうに目を下に移していくと、自然に、長く伸ばしたストリートヘアが顔の前に降りてきてしまいます。

今、私はペンを置き、その髪を背中側の側へまとめなおしたところです。

たぶん私は今、——自分で言うのは恥ずかしいので

すが——人並以上に美しい若妻に見えるはずです。

その私が、ほんの四年前、二四歳の時までは、ごくふつうの男としての人生を送っていたのです。

これが異常でなくてなんでしよう。

世間の良識からは、けっして受け入れられない生き方なのだと思えます。

その上、私は……。

いえ、それはおいおい書くことにいたしましょう。

ともかく今の時点では、私にとってこの生き方は、ごく自然な成りゆきだったという気がします。

私は、男だった時代の心象の記憶がまだ残っているうちに、この道を選んだ私なりの理由をどうしても書き記しておきたいと考えたのです。

目の前の窓から、庭に一本だけ立つしだれ柳が風に揺れるのが見えます。

しだれ柳は、英語ではウィーピング・ウイロー。直訳すれば「泣き柳」という意味です。

私の：：いえ、男時代の自分のことを書くには、やはり「僕」の方が自然でしょう：：僕の、幼い頃の記憶は、この「泣き柳」の下で泣いている弟、治の姿から始まります。

2

僕と治は、四つちがいの二人きりの兄弟です。山陰のある小都市で生まれました。僕たちは、幼い頃から仲のよい兄弟だったと思います。

小学校低学年までは健康優良児だった僕とちがい、未熟児で生まれた治は、体の小さい泣き虫の子供でした。

庭を走る僕を追いかけ、ちよこちよこと歩いてはころび、いつも、柳の木の下で泣いていたものです。

僕もそんな治がかわいくて、日曜など、友達の手誘いもことわって、治と一日中いっしょに過ごしたりしました。

そして、僕が小学校二年の時、治が四才の時に、その「事故」は起こったのです。

その日曜日、父の経営するメツキ工場は休業だったので、父は業者組合の寄り合いとかで、朝から出かけていました。そして、母も買い物に出た三時すぎ、僕は「治ちゃん、探検ごっこしようか」と言ったのです。

ふだん僕たちは、庭から入れる事務室以外には、父の工場への立ち入りを禁じられていました。

「工場の中は危ないものがいっぱいあるから」というのがその理由でした。

好奇心旺盛な天才の少年にとって、大人たちがそんなふうにする場所は、まさに「探検」にうってつけの場所だったのです。

僕は治を引き連れて、工場の事務室を通り、スレー

トぶきで薄暗い、その「秘境」へと足を踏み入れました。

その中は、まさにジャングルでした。

コンクリートの床には、あちこちに気味の悪い模様を描いてシミが広がり、壁ぎわには、小ささまざまな形をした金属部品が積み上げられていました。中心部には四基のメッキ窯が設置され、その中から、家の中に漂ってくるより、数十倍も強烈な臭いが発しています。

した。

最初は手をつないでおずおずと探索していたのですが、そのうち僕は、あちこち走り回り、メツキ窯の中をのぞいたり、天井から垂れ下がったホイストのスイッチをいじったりしました。やがて、「お兄ちゃん、待って」と言いながらついてくる治との間で自然発生的に隠れんぼがはじまったのです。

僕が機械の陰や部品が積まれたパレットの後ろに隠

れると、治は一生懸命になつて僕を探します。見つかる
るとまた僕が逃げ、治が探す。そんなことを三〇分近
く繰り返していたでしようか。

その時、僕はいちばん大きなメツキ窯の裏側に隠れ
ていました。すぐ近くを走る治の足音が、僕を探して
行ったり来たりしているのが聞こえました。奇妙な形
で伸びた数本のパイプの間から、息をひそめてのぞく
と、治は三メートルほど先にある機械の裏側をきよる

きよろと探していました。

治がなかなかこちらに気づかないので、僕は「ひゅー」と口笛を吹き、あわてて身を隠しました。その時、天井から垂れ下がっていた何かのホースに体が触れ、ホースが大きく揺れました。

「あ、お兄ちゃん、みつけ」

治がこちらへ駆けてきました。

と、揺れたホースが、メツキ窯の角の部分に載せて

あつた汚れた二リットル缶に当たつたのです。ガシヤンという音とともに缶が落ち、すぐ、ワツという治の泣き声が聞こえてきました。

(ちえっ、また、泣き虫小僧がはじまつたぞ)

僕はそう思って、まだしばらく隠れていようと思つた。

しかし、治の泣き声は、いつものようなめそめそという感じではなく、しだいに激しく泣き叫ぶというふ

うになっ
ていきま
した。

「痛いよー、痛いよー、お兄ちゃん、痛いよー」

さすがに僕も、異常な気配を感じ、メツキ窯の陰から顔を出しました。

見ると、治はうずくまるようにして、顔を押しさえているのです。コンクリートの床には、表面が緑色っぽく光る茶褐色の液体が飛び散っていました。

治の左側のえりから袖あたりにも、その色が染みつ

いていましたから、それが治にかかったのだということがすぐわかりました。

僕は、泣き叫ぶ治を抱き起こし、その背中を支えるようにして、家の方へ連れて行こうとしました。

治は顔のあたりに手をあてがい、身悶えるようにして痛がっていたので、幼い僕の力ではなかなか前へ進ませることができません。

僕自身も、何かたいへんな事が起こってしまったと

いう衝撃的な思いに体ががたがたふるえていました。

それでも、抱きかかえるようにして事務室を通り、
なんとか庭まで連れ出すことができました。

治は相変わらず激しく泣き叫んでいました。もはや
「痛いよ」という言葉すら発せられず、ただわけのわ
からないことを喚いているという感じでした。

その声を聞きつけ、買い物から帰ったらしい母が、
縁側まで出てきました。

母は一瞬硬直したようにこちらを見ましたが、すぐ、工場のドアが開いたままなのに気づき、悲鳴のような声をあげて裸足で庭へとび降りてきました。

「治ちゃんっ！」

母は僕の手から治を奪うと、押さええている手をもぎ取るようにして、その顔をのぞき込みました。見上げている僕からははっきり見えませんでした。それでも治の左頬から首筋のあたりが腫れ上がっているのが

わかりました。

蒼白になった母は、治を抱きかかえたまま、走るように家にあがりました。

そのあと僕は、しだれ柳の下でじっと立ったまま、家の中を見ていたのだと思います。

今思い出すとそれは、まるで映画のスクリーンの中のような光景です。

治を畳に寝かせた母は、電話に飛びつき、何か叫ぶ

ように話していました。

電話が終わると、また治を抱き上げ、立て膝のまま
で、もっと小さな赤ん坊を寝かしつけるような抱き方
で、顔をのぞき込んでいました。

「ごめんね、治ちゃん。がんばるのよ」

そんなことを、何度も呪文のように繰り返していた
ようでした。

しばらくして、救急車のサイレンが聞こえ、それが

家の表で停まりました。

三人の白衣を着た男たちが、どたどたと家へ上がり込んで来て、母の腕の中の治をちらりと見ると、すぐに二人を取り囲むようにして出て行きました。

サイレンが遠ざかり、僕はひとり取り残されました。

僕は家へ入る事もせず、ずっとそのしだれ柳の下で立っていました。母から連絡を受け、父が呼びに来るまで、ずっとそうしていたのだと思います。

後に父から聞いたところによると、あの缶には六価クロム系の廃液が入っていたのだそうです。前日、本来なら処理槽に捨てなければならなかったものを、若い従業員が忘れて帰ったのだということでした。

たとえそうであるにしても、僕があるときホースに触れなければ、いえ、それ以前に「探検ごっこ」などと言い出しさえしなければ、治があんな目にあうこと

はなかつたでしょう。

幼い僕は、治が入院している間じゆうそんなことばかり悔やんでいました。

しかし、父や母はけっして僕を叱りませんでした。

父母は、すべてを自分たちの責任だと考えているようでした。

事故の後、父は、庭側の事務室のドアを閉鎖し、それでも満足できず、その間に高い塀を造ってしまいま

した。

おかげで家から工場へは直接出入りできなくなり、朝になると父は、まるでふつうのサラリーマンのように玄関から出勤して行くのでした。父にしてみれば、二度とこんな事があつてはならないという思いだったのでしよう。

しかし、その事故は、僕たち家族がいくら忘れようとしても忘れられない「傷跡」を残したのでした。

二ヶ月の入院ののち帰ってきた治の顔からは、以前の面影がすっかり消えていました。

左側の額から頬、首にかけて、大きなアカアザができていました。左の目尻から口のはしにいたる場所には、皮膚移植の痕跡であるひきつったような縫い傷がありました。さらに、耳の上から後ろ側の毛はすっかり抜け落ち、痛々しい肌が露出しているのです。

その顔を見て、僕の心の傷は、えぐられ、拡大され

るような気がしました。

しかし、このころはまだ、それが決定的な痛みにはなっていないませんでした。

当初、治は、顔に傷ができただけで、以前と変わらず、泣き虫だけれど明るい子でした。僕に甘えてくる様子も少しも変わっていませんでした。

それが、幼稚園へ行くようになり、さらに小学校へ上がる頃になると、すこしずつ変化してきました。

学校から帰った後や、外で遊んで帰ったとき、泣いていることがよくありました。その泣き方が以前とはちがいで、声を詰まらせたように、いかにも悔しそうに泣くのです。

上級生や級友から、顔のことだからかわれ、いじめられていたのでしょう。

一度、僕自身もその現場を直接目撃したことがあります。

年が四歳も離れていることもあり、ふだんは下校時などいっしょになることはなかったのですが、たまたま夏休み前の短縮授業の時期。六年生だった僕が校門を出ると、治が、二・三年の子どもたちと前を歩いていました。

治は、その子どもたちの最後尾で、小さな体に五人分のランドセルを持たされ、よたよたとついて行くのです。

「おい、ベム、なにやつとるんや。早よ来んか」

子どもの一人が振り向いてどなりました。

「ベム」というのは、当時再放送されていた「妖怪人間ベム」のことです。

治が、必死になって追いつくと、今度は別の一人がはやしたてました。

「早く人間になりたいーい」

そして、全員が大笑いするのです。

僕はたまらなくなつて、早足で近づきました。それに気づいた悪ガキたちは、ばつの悪そうな顔をして、治から自分のランドセルを取り上げると、逃げるようにして走り去りました。

そのころには、治はもう、泣くこともせず、あきらめたような悲しげな表情が身についていました。

「あいつら、いつもあんないけずするのんか？」

「……うん」

治は僕の横で、うつむき加減に黙々と歩きながらうなずきました。

そんな治を見ているうち、僕の心の中の罪悪感は、どうしようもなく大きくなっていったのです。

(治の顔をあんなふうにしたのは、僕なんだ)

その思いが、思春期になり始めていた僕を責めさいなみました。

子供部屋で机を並べて勉強していても、その顔を見

るたびに、僕は自責の念にとらわれるのでした。

そしてもうひとつ、僕には、自分ではどうすることもできない、治に対する負い目のようなものもありました。

自分で言うのもおかしいのですが、僕はいわゆる「美少年」の部類でした。

幼い頃から「女の子みたいにかわいいわね」とよく言われました。

小学生時代、人より勝っていた体格も、中学二年くらいで伸びがとまり、高校に入る頃には、標準よりずっと小柄で細身、しかも色白という、典型的な美少年になっていったのです。たぶん、若い頃驚くほどの美人だったという母に似たのでしよう。当然、女子からもちやほやされています。

僕にはそれが重荷でした。治の顔をあんなふうにした張本人である僕が、人からもてはやされるような美

形であつていいはずはない、と思いました。そしてまた、そんなことを思つてしまうこと自体に、僕の嫌らしい優越感を感じ、自分がどうしようもなく心の卑しい人間に思えてくるのでした。

僕にくらべ、治の体型は父似になつていきました。

がつしりした骨太の体つき。しかも中学から始めた陸上部で、黙々と砲丸投げに打ち込んだせいで、上半身の筋肉が発達し、ごつごつした体型になつていったの

です。

そして、その上に、例の半分がアカアザでおおわれた顔……。。

女の子たちにも、気味悪がられ、無視されていたにちがいありません。

そんなこともあって、長じるにしたがって、僕の罪悪感はますます募っていきました。

治があいからず僕を募ってくれていた分だけ、罪の

意識は僕の中へ深く潜行し、その「闇」はいよいよ大きくなつていくのでした。

受験の頃には、それがいらだちへと変わつて、ついには治といっしょにいることさえ息苦しいと感じるようになっていったのです。

僕が父の反対を押し、わざわざ東京の大学へ行ったのも、そんな心情が大きく作用した結果でした。

3

大学時代、東京のアパートで一人暮らしをして、僕は始めて精神的な自由を味わいました。

気のあった仲間とのサークル活動、コンパ、アルバ

イト、：：治への気がねなくできるそれらすべてのことが、僕にとっては苦痛からの解放でした。

恋愛もしました。セックスまでいたるつきあいも何度かありました。

時に治のことを思い出し、胸が痛みましたが、僕はせつかく手に入れた自由をなくしたくないと思いました。た。

やがて就職の季節が来て、その思いはますます切実

なものになっていったのです。できるだけ治のそばで暮らしたくない。東京に残りたい。

家業を継がせようとする父にまたもや逆らい、東京の大手広告代理店に就職した理由も、けっきよくはそれでした。

仕事に就いてしばらくして、僕には恋人ができました。

香坂恵美子という、仕事を始めて二年目のメーカー
ツプアーチストでした。

その代理店で僕はクリエイティブの仕事につきまし
た。と言っても、こちらは駆け出し。名前ほど立派な
ものではなく、最初は、先輩のディレクターについて、
制作関係のあれこれの雑用を担当するというものでし
た。

たまたま僕のいたクルーがもっていたクライアント

に、婦人衣料メーカーが多かったせいで、モデル撮影に立ち合う機会が多くありました。

恵美子は、あるモデルクラブの専属で、たいていはモデルについてやってきました。

何度か顔を合わすうち、親しく口をきくようになり、やがてプライベートでも会ったりするようになりました。

仕事を始めたばかりの僕にとっては、恵美子が現場

で見せる男勝りのプロ根性のようなものが眩しく感じられたものでした。そして一方で、二人きりで会ってみると、恵美子は僕に甘えきったかわいい女になるのでした。

半年もたたないうちに、僕と恵美子はぬきさしならない関係になっていました。彼女が僕のマンションに泊まり、朝、二人で撮影現場に出向くというようなこともたびたびでした。

そういう意味では、僕と恵美子はどこにでもいるふつうのカップルだったと言っていていいでしょう。ただひとつ、僕たちは、たいていの恋人たちがしないようなことも、よくしていました。

「明日の撮影、どうしてもメイクのイメージがつかめないのよ。ちよつと協力してくれない？」

つきあいだして三ヶ月くらいの頃だったと思いま

す。僕のマンションに泊まった恵美子が、そう切り出しました。

「……協力って？」

風呂上がりで、パジャマに着替えた僕が聞きました。

「ちよつと秀夫さんの顔でテストしてみたいのよ」

「え？つまり、僕に化粧するってこと？」

「うん。ダメ？」

「よせよ、そんな気味悪いこと」

「そんなことないって。秀夫さんだったら、ぜったいきれいになるから」

恵美子はそう言って、ベッドの上に化粧品を並べ始めたのです。

仕事のためでもあり、ふだんスタッフたちの役に立っているとは言えない新米ディレクターだった僕は、しぶしぶながら恵美子の前に座りました。

恵美子は、シャンプーして濡れた僕の髪に手早くタ

オルを巻きつけると、ファンデーションを塗り始めました。

それから約三〇分後。

初めて化粧された自分の顔を、鏡で見たときは驚いたものです。

恵美子のバニティケースの蓋についた鏡の中の顔は、まぎれもなく「若い女」でした。それも、日頃見慣れているつんけんしたモデルより、よほど女らしい

顔なのです。

「ほら、秀夫さん、すごい美人。私、いい練習台ができて、助かったわ。これからもよろしくね」

恵美子は冗談とも本気ともつかない口調でそう言いました。

その言葉どおり二度三度と恵美子にメークされるうちに、僕も、最初持っていた抵抗感をなくしていきました。

そのうち、恵美子が泊まるときにはいつも僕の顔でメイクの練習をするようになり、僕は僕で「ファンタスティックにするなら、ここのシャドーをぼかし気味にしたら」とか「下唇をもう少し厚く塗れば、セクシィになるんじゃない？」とか、鏡を見ながらアドバイスするようになっていったのです。

そして、時にはそのメイクを落とさずにベッドインするようなこともありました。そんな時には、お互い

レスビアンのような感じになって、ふだん以上に刺激的な愛撫を、何時間にも渡って続けたものでした。

そんな一風変わってはいるけれど、ハッピーだった半同棲生活に別れを告げなければならぬ時が、突然やってきました。

一浪していた治が、東京の大学に合格し、僕といっしょに住むことになったのです。

4

まだ寒さの残る三月下旬のある土曜日、治は上京してきました。

夏休みや冬休みには帰郷していましたが、ずっと会

つていなかっただけではないのですが、これまで治とは無関係な空間だった東京の僕の部屋に入ってきたその顔を見て——残酷な言い方だとは思いますが——、ちよつとぞつとしたのを覚えています。

それにもまして、治が、「兄貴、ごめん。世話になるね」と、申し訳なさそうに、そして、悲しそうに言ったときには、僕は、五年の間忘れていた暗い記憶を一度に思い出していました。

（治、お前はそんな言い方しちやいけないんだ。僕に
対してはもつと凶々しく、押しつけがましく振る舞っ
ていいんだぞ。そうしてくれた方が僕はずっと気が楽
なんだ：：）

しかしそれを治に言うことはできません。そうすれ
ば、ナイーブな治をさらに苦しめることになるのだか
ら：：。

「そんなに遠慮するなよ。せつかく苦労して大学受か

ったんだ。僕に気がねなく、思いつきり遊べよ」

そんなふうにししか言えませんでした。

そして、その日から僕は、治の手前、恵美子と会うこともままならず、ふたたび暗い罪悪感の中で毎日を送ることになったのです。

しかし、事態は意外に早く新たな局面を迎えました。

入学して一ヶ月ほどたった頃から、治がずいぶん明

るくなつてきたのです。

上京した当初は、学校へ行く以外はほとんど外に出ず、いつも部屋の片隅で雑誌を読んだりビデオを見たりしていたのが、夜まで遊んできたり、日曜などいそいそと出かけて行くようになったのです。時には、酒を飲んで陽気に帰ってくることもさえありました。

そして、それからしばらくして、治は僕にこう告白しました。

「兄貴、俺、彼女ができたんだ」

僕は、ああ、やっぱり、と思うと同時に、ちよつと不安も感じ、いろいろ聞いてみました。

治がつきあっているというのは、同じ大学の英文科に通う女子学生でした。新入生向けのオリエンテーションでたまたま隣り合わせ、ボールペンを貸したのがきっかけになり、その後、親しく話すようになったというのです。

治は照れくさそうに、パス入れに挟んだその子の写真を見せてくれました。

けっして美人とは言えないまでも、どこにでもいそうな地方出身の女子大生という感じでした。どこか気の強そうな表情が気になりましたので、まずは一安心しました。

治の暮らしぶりが生き生きとしていくにしたがつて、僕の気持ちも晴れていくようでした。罪悪感にさ

いなまれることなく真正面から治に対することができるのは、子どもの頃以来でした。

そう、こんなこともありました。

僕のマンションは二DKで、そのころは一部屋ずつを僕と治で使っていたのですが、ある夜、僕が遅くまで企画書をワープロ打ちしていると、治が部屋に入ってきました。

「どうしたんだ？」と聞くと、パジャマ姿の治は、頭

をかきむしるようにして、「寝られないんだ」と言い
ました。

「兄貴、女の子と決定的な関係になるにはどうしたら
いいんだ？」

「えっ？　つまり……、『寝る』ってことか？」

「いや……まあ、つまり……」

「……馬鹿だなあ。そんなもん自然にやりやあいいん
だ」

「だけど、俺、そういう経験ぜんぜんないし……」

「そうだな、まず、好きだって気持ち伝えることだな」

「それは、なんとなくわかってると思う」

「はつきりとか？」

「ああ……たぶん」

「じゃ次はキスだな」

「……うん」

「どっかで食事でもして、その後、ロマンチックな場所へ誘う。そこでしばらく話をする。相手の肩にそれとなく手でもかけて、お互い気分が盛り上がったところで、……な」

「……」

「で、もし相手がいやそうじゃなかったら、そのままホテルへ直行だ」

「いきなり？」

「そんなもんは早い方がいいんだ」

妙に生真面目に僕の話しを聞いている治がおかしくもあつたのですが、そんなふうには話ができることが、僕にはとてもうれしく感じられたものです。

治に恋人ができたおかげで、僕も恵美子と頻繁にデートできるようになりました。以前のように僕のマンションでというわけにはいきませんでした。時には恵美子のアパートで泊まってしまふようなことも平気

になりました。

そして、そんな平穏な日々がしばらく続いた後、突然、僕と治にとっての「運命の日」が来たのです。

5

その日は、僕の側にもいくつかの偶然が重なって
いました。

第一に、その日と翌日、都内のある貸しスタジオで、

女性下着メーカーの新製品のカタログ撮りがあったこと。

第二に、たまたまその日カメラマンの車が故障し、僕が機材を運ぶことになって、社用車を借り出していたこと。

そして第三に、その日の撮影を終えた後、スタッフ全員で飲んで、泥酔した恵美子を、その社用車でアパートまで送り届けたこと、などなど……

その結果、僕がマンションに帰りついたとき、車内には、撮影機材の他、段ボール三個分の下着類、恵美子が置き忘れたメイク用のバニティケース、それにモデルが使ったヘアウィッグが載っていたのでした。

それらを積んだまま路上駐車するわけにもいかず、僕は何度も往復し部屋へ運び上げなければなりませんでした。

その後、汗になった体を流すため、シャワーを浴び、

自分の部屋へ入ろうとした時です。治の部屋から、むせび泣くような声が聞こえたのです。

「……？」

僕は、治の部屋をノックしてみました。返事はありません。

「治、どうかしたのか？ 入るぞ」

僕はノブに手をかけ、ドアをそつとあけました。

部屋の中は灯が消され、真つ暗でした。治の気配は、

ベッドの上からではなく、部屋の真ん中あたりからします。僕は、ただならぬ雰囲気を感じ、そのあたりをうかがいました。しばらくすると、暗闇に目が慣れ、ぼんやりと治の姿が見えてきました。

治は、そこでこちらに背を向けて正座していました。よく見ると、その肩が小刻みに震えているようです。

僕の中で漠然とした不安が急速に膨らんでいきました。

「どうしたんだ……？」

僕は、びくびくしながら聞きました。

治は答えませんでした。

しばらくの沈黙の後、僕がもう一度口を開くことになりました。

「彼女と……何か、あったのか？」

それでも治は黙っていました。しかし、震えていた肩の振幅がだんだん大きくなり、やがて、まるで絞り

出すような嗚咽が部屋の底に響きました。

「……さ、幸子の奴、……『ばけもの』って言ったんだ。……『やめて、ばけもの』って……」

嗚咽の中でそう言った後、治は、そのがっしりとした背中を思いきり丸めるようにして、男泣きしました。僕はどうすることもできず、暗闇の中に佇んで、それを見ていました。

部屋の灯をつけて、治のそばに駆け寄ることもでき

たでしょう。でも、その顔を灯の下にさらすことは、治にとつてもつと残酷なことのように思えました。：いえ、たぶん、僕自身が治の顔を見るのが恐かったです。

そのまま、どのくらいの時間がたったのでしょう。泣き疲れた治の声が、小さくなり、やがて聞こえなくなりました。それでも治は僕に背を向けたままです。

僕は、何か言わなければならぬと思いました。何か言つて、できればこの場から早く立ち去りたいと：

「……まあ、人生にはいろいろあるから……気を落とさずに頑張れよ……な」

僕は、そんなことを言つて、部屋を出て行こうとしました。

「……兄貴」

向きを変えた僕を、治は押し殺した声で呼びとめました。

そして、小さく、しかし乾いた明瞭な言い方で、言ったのでした。

「兄貴のせいで、俺はきつと……セックスの味も知らずに死んでいくんだな」

僕の体は硬直しました。ノブにかけた手だけが、激しく震えていました。

「……ごめん」

僕にできたのは、そう言って逃げるようにドアを閉めることだけでした。

後にも先にも、治が僕を責めるようなことを言ったのは、このときただ一度だと思えます。

自分の部屋に戻り、ベッドに腰掛けたものの、僕には、もちろん寝つくことなどできません。

いつかはこんな時が来ることはわかっていました。でも、実際それに直面してみると、シヨックでした。

やっぱり治は僕のことを恨んでいた。

僕はただ、その思いに耐えて、じつと座っていたのです。

治の部屋からは物音ひとつ聞こえませんが。

やがて僕は、デスクの上に封の切っていないスコッチの瓶を見つけました。職場の誰かが、海外でのCF撮

りの土産にくれたものだったと思います。僕は、その酒にすぎりました。

デスクに座って、何杯も何杯もストレートで飲み続けました。その瓶を空にすると、今度は冷蔵庫からビールを出してきて、何缶かあげました。

治のことを忘れたいと思って飲み始めた酒なのに、飲めば飲むほどそのことが重くのしかかってくるようでした。

理性などとうの昔に崩れ去っているのに、知覚だけが妙にはつきりしている。僕はそんな状態になっていました。

何缶目かのビールを取りに、キッチンへ向かいかけたときです。僕は、足元に置いてあったいくつかのものにふと目をとめました。

その時、何でそんなことを思ったのか、今考えてもよくわかりません。

でも僕は、とっさにそのことを思い立ち、すぐ行動に出ていました。

まず僕がしたことは、パジャマを脱ぐことでした。パジャマを脱ぎ、そして、ブリーフもとって全裸になる。全裸のまま、足元の段ボール箱の中を物色しました。

そこには何枚もの女性下着が入っていました。僕はその中からカップのしっかりしたブラジャーとシェー

プアツプパンツ、そして胸元にレースをあしらった白いスリップを選び出しました。

まず、シエープアツプパンツをはく。そして、ブラジャー。なかなか後ろのホックがとめられませんでした。だが、格闘の末、なんとかつけることができました。

ふくらみをもたせるために、幾枚かのショーツを丸めてカップの中に押し込みました。そのあと、スリップを頭からかぶりしました。酒で火照った体に、絹の冷た

い肌触りが、妙に心地よいと感じたことを覚えています。

それから僕は、恵美子のバニテイケースをベッドの上に置き、開いて、鏡を見ながら化粧にかかりました。

顔を化粧水で冷やす。

ファンデーションを塗る。

シャドーベースを入れる。

そして、アイメイク。マスカラとアイラインは、簡

単ではなかつたけれど、恵美子がやっていたように左手で右手首を固定して……。

さらにチークを刷^はき、紅筆で真っ赤な口紅を塗る。

最後にパウダーで仕上げ、綿棒で余分な部分を修正する。

恵美子にしよっちゆうメイクされていたおかげで、僕は、迷うことなくそれらのことができました。

そのあと、ケースからロングソバージュのウィッグ

を出してかぶりました。

立ち上り、クローゼットを開けて鏡を見ると、そこにはスリッパ姿もなまめかしいひとりの女が立っていました。

僕は出来に満足し、部屋を出ました。

ドアを開け、灯をつけると、治はまだ先刻の位置に、肩を落とす、胡座をかいて座っていました。

僕が後ろ手にドアを閉めると、治は鈍重な仕草でこちらを振り向ききました。そして、あんぐりと口をあけました。

僕は、ちよつとうつむき加減に大きく目を開いて、そんな治の顔を見つめていたのだと思います。

「……え？ ……兄……貴？」

治は、すぐには僕だということがわからなかつたようです。

僕はゆつくりとうなずきました。

「……なに……を……」

治はうろたえたように目を泳がせました。

「治、僕を、抱け」

僕は治に近づいてゆきました。

治は床に腰を落としたまま、後ずさりしました。

「抱いてくれ、僕を……女だと思って」

僕は、治の上におおいかぶさるように、倒れこみま

した。

「あ、兄貴、なに考えてんだ」

治は、さらに後退しました。

僕は治の脚にすがりつくようにして、それを追いました。なぜだか、僕は必死になっていました。治に嫌われたくない、と真剣に思いました。

治の肩がベッドの端に当たりました。

追いつめられた治は、腰を浮かし、ベッドの上に腰

掛ける形になりました。

僕は、さらにそれにすぎり、治の両脚の間に体をねじ込むようにして、その股間に頬ずりしたのです。

「やめろ、兄貴、気でも狂ったのか」

治は、恐怖に駆られたように、体を反らして逃げようとししました。

しかし僕には、すりつけた頬の下で、治のそれが盛り上がってくるのが、はっきりとわかりました。

僕はすかさず、ズボンのジッパーを降ろし、トランクスの下からそのペニスを引っ張り出していました。

それは、貧弱な僕のものなどとはくらべものにならないほど、太く、長く、そしてごっごっしていました。

僕はそれを両手でしっかりと握りました。色の白い僕の手で包まれると、その張りつめた亀頭の部分は、さらに黒光りしているように見えました。

「たのむから、やめてくれ」

治は、体を反らしながら悲鳴のような声をあげました。

僕はかまわずに、それに頬ずりし、キスし、そして口にふくみました。

くわえると、それはさらに怒張し、僕の口を痛くするほど開かせました。

僕は必死になってそれを吸いました。舌を使い、そして時に首を前後に振る。

「……うっ」

治は、小さな唸り声をひとつあげると、抵抗しなくなりました。

最初の一滴が、僕の口の中に出てきたのがわかりました。

僕がさらに強く吸うと、治の腰が自然に動き始めました。それに気づくと、なぜか僕自身も興奮していました。

くわえたまま、そっと治を見ます。目を閉じ荒い息づかいをする治の後ろで、窓の外が白みはじめていました。

治の腰の動きがさらに激しさを増しました。

太く、そして鉄のように堅くなったそれが、何度も僕の喉の奥に向かって突き上げられてきました。僕は窒息しそうになりながら、それに応えました。

やがて、治のペニスは怒張の極限をむかえました。

治の口から、唸るような声が漏れ、僕の喉に何か熱いものがあたる感触がありました。

その時、僕がとっさに考えたのは、妙に現実的なことでした。

このスリッパはメーカーからの借り物だ。汚すわけにいかない。

僕は、その青臭いにおいのする液体を、すべて呑み下していました。

その夜の記憶は、
そこでぷつぷつと途切れず。

6

タイマーがセットされたステレオの音で目を覚ますと、僕は裸のまま、自分のベッドの上にいました。

最初僕は、自分がなぜ裸のままなのか、そして、な

ぜこんなにも頭が痛いのか、よくわかりませんでした。

そうだ。昨夜、この部屋でしこたま酒を飲んだんだ。

なんであんなに飲んだのか……そう、治だ。治になにか言われて……え？……！

そこまで考えて、やっと昨夜のことをぼんやりと思
い出しました。

それでも僕には、その記憶が夢なのか現実なのかよくわかりませんでした。

ふと見ると、顔を埋めていた枕に、擦りつけたような赤い汚れがついていました。それはどう見ても口紅でした。

僕は、手の甲で唇を拭ってみました。手にはやはり赤いものがつきました。

びっくりして伸ばしたもう一方の手に、今度は髪の毛のかたまりが触りました。ソバージュのウィッグです。

僕はあわてて上半身をおこしました。

床には、スリッパとショーツとブラジャーが脱ぎ捨てられていきます。

起き出した僕は、クローゼットの鏡で顔を確認しました。かなり崩れた化粧のあとが残っていました。

僕は、呆然と立ちつくしました。

昨夜の“あれ”は、やっぱりあったんだ……

僕は、取り返しをつかないことをしてしまったとい

う思いに身震いしました。

どうしよう。どうしたらいいんだろう……

僕はしばらく裸のままを考えていましたが、いったい、何をどう考えてよいものやら、自分でもよくわからないという状態でした。

とにかくなにか着ようと思いたち、シャツとズボンを身につけながらも、頭の中は混乱を極めていました。

顔を洗って化粧を落とさなければいけない。そう考

えた僕は、ドアを開け、洗面所へ行こうとしました。そして、ダイニングに一歩足を踏み入れたところで、全神経が凍りつきました。

治がいたのです。

治は、流し台の水道に口をつけるようにして、直接、水を飲んでいました。

気配に気づき、治が振り向ききました。

しかし、僕と目が合うと、治はすぐその視線をそら

しました。そして、テーブルの上に置いてあつた教科書とノートを乱暴につかみ、そのまま玄関に行き、靴をつっかけるようにして出て行ってしまったのです。

僕は声をかけることもできず、その後ろ姿を見送るだけでした。

僕は激しい自己嫌悪に陥りました。

酒のせいであるとは言え、僕はとんでもなく狂気じ

みたことをしてしまつたのです。

それは、痛手を受けている治に対し、さらに拷問を加えるような行為でした。

治は、女から「ばけもの」とまで言われ拒絶されたあげく、男から、それも実の兄から、フェラチオされたのです。これほどの屈辱があるでしょうか。

ただでさえコンプレックスを強く持っている治を、僕はこの手で地獄の底へつき落としてしまつたので

す。

それは僕が治に対してつけた二度目の、そして決定的な「傷」なのでした。

なんであんな馬鹿なことをしたのか？

それが自分でもさっぱり理解できないだけに、僕の自己嫌悪は激しいものでした。そして、治に対する罪悪感は、以前の何百倍にも増して、僕の上に重くのしかかってきました。

治になんとか詫びたい。どうにかして償いをしたい。僕はそう思いました。

ところが、あの日以来、治は徹底的に僕を避けるようになったのです。

毎日、できるだけ僕と顔を合わせないように行動していました。

朝、僕が起きると、治はすでに出かけた後でした。

僕が帰ってくる頃には、自分の部屋に籠もっていました

た。

どうしても顔を合わせてしまう時には、視線をそらし、あたかも僕が存在しないかのように振る舞うのです。

まったくとりつく島がない。そんな状態でした。

治は、僕を激しく憎悪しているにちがいない。憎まれてもしかたのないことをしたのだから……。

僕はふたたび、暗い罪の意識の淵に落ち込んでいき

Under The Weeping Willow

ま
し
た。
。

7

あの日から一か月近くが経過して、僕はさらに思い
つめていました。

治に迷惑がかからないように自殺するにはどうした

らいいか。そんなことを大真面目に考えたりするほどになっていました。

職場では、仕事に精を出すことでなんとか気を紛らわせていましたが、恵美子と会ったりしてもどこか上の空で、恵美子を怒らせたことも再三でした。

そんなある金曜の深夜でした。

僕は自分の部屋で、いつものように、暗い思いに沈

んでいました。

その時、ドアがノックされたのです。

「……え？」

僕が返事をする前に、僕以上に思いつめた顔の治が入ってきました。

「兄貴……」

治がぼそりと言いました。

「……うん」

治は激しく非難するのにちがいない。そう思いま
した。そして僕は、むしろそうしてくれることを望んで
いました。

「……兄貴……じつは、頼みがあるんだ。怒らないで
……聞いてくれるかな」

治の意外な言葉に、僕は思わずうなずいていました。

「あの夜のこと……」

「うん、わかってる。ごめん。ほんとにお前には……」

「いや、そうじゃないんだ」

「……え？」

「俺、あの夜のこと、忘れられないんだ」

治は僕の視線から目をそらし、うつむきながら深刻な口調で言いました。

「……もう一度……もう一度だけ、女になって、あのときみたいなこと、してくれないかな。……ごめん……こんなこと言っ……」

「……お前……」

「……俺、あんなきれいな女見たの、生まれて初めてなんだ。しかも、その女が、いきなりあんなことしてくれたんだ。忘れられなくなったんだ。あの夜のことだ。あの女が。でも、それが実の兄貴なんだから……。俺、忘れようと思ったよ。忘れなきやいけないうて。

だから、兄貴とはなるべく顔合わせないようにしてたんだ。でも、ダメなんだ。俺、毎日、兄貴のことばっ

かり考えてた。この一か月、毎晩、女装した兄貴の夢
ばかりみてる。兄貴、ほんとにきれいだったんだ：
。なあ、兄貴、たのむよ。正気じゃできないことだ
ってぐらい、じゅうぶんわかってるんだ。でも、もう
一度だけ、もう一度だけでいいんだ。あの夜みたい
に……。嫌だったらあはしてくれなくてもいいから。
せめて、女装した兄貴の顔、もう一度見たいんだ」

僕は、ただただ驚いて、治の顔を見ていました。

それから二十分後、僕は近くにある二四時間営業のコンビニエンスストアに買い物に出ていました。

治の切実な口調から、僕は、どうしてもその望みに応えてやらなければいけないと思ったのです。ところが困ったことに、手元には、あの夜あった化粧品も、女性用の下着もありませんでした。それで、そのコンビニに化粧品を買いに行ったというわけです。

そこにあつたのは、恵美子のと比べたらどうしようもないような安物ばかりでしたが、それでも必要なものはひととおりに揃っているようでした。

僕は、それらの品をカゴにつっこみ、じろじろこちらをうかがうレジのアルバイトの視線にもかまわず、金を払って、マンションに急ぎました。

途中、「大人のおもちや」の店が開いているのを見つけ、そこで、黒のブラジャーとパンティ、それにピ

ソクのベビードールを手に入れました。

家へ帰ってシャワーを浴び、下着とベビードールを身につけると、さっそくメイクにかかりました。

ウィッグがないので、しかたなく、ドイツプをいっぱいつけて髪を立て気味にすると、ちよつとはすっぱな娼婦ふうの女ができあがりました。

この前とずいぶん感じのちがう、こんな女でも治は

気に入ってくれるだろうか？

僕は、そう思つてびくひくしながら、治の部屋をノックしました。

治はベッドの上に寝転がつて雑誌を読んでいましたが、僕が入つて行くと、半身を起こし、僕の頭の天辺から足の先まで、まるでなめるように見ました。

無性に恥ずかしくて、顔が自然に上気していったことを覚えています。

僕は一步一步、治に近づいて行きました。照れもあって、どうしてももじもじした歩き方になってしまいました。

僕はベビードールを着た娼婦なんだ。

そう思うことにしました。若い客に、これから思いきりサービスするんだと。

ベッドに腰掛け、治の顔をじっと見つめました。治は、真剣に見返してくるものの、どうしたらいいかわ

からない様子でした。僕は目をつぶり、唇をつき出し
気味にして、その顔に近づけていきました。

と、治が力強く僕を抱きしめてきたのです。小柄な
僕の体は、治の腕の中にすっぽりと納まってしまいま
した。

治の唇が僕のと重なります。

この前とちがい、酒も入っていなかったの、精神
的な抵抗がなかったわけではありません。でも僕は、

必死に、自分は娼婦なのだと思おうとしました。

そして、そう思うと大胆になれました。舌をうまく使って治の口をあけさせます。とたんに、治の舌が僕の口の中に乱暴に入ってきました。僕はそれに応えて、舌を絡めました。

僕たちは、数分間、そんなふうに激しい口づけを交わしつづけました。

僕の中で何かが変わっていくのがわかりました。

この二十年間近く持ち続けた、治に対する「わだかまり」が氷解していく。たしかに、そんな気がしたのです。

僕は、治の背中にまわしていた手を、そつと股間へと移動させました。

パジャマの下で、それはすでにいきり立っていました。僕は、ひくひくと動いているその太くて堅いものを、ゆっくりと撫でました。

パジャマの上からじゅうぶんに撫でまわしたあと、手をその中にすべりこませ、それを握りました。僕の手に触れたその熱い感触を、今でもはっきりと思い出せます。

そつと目をあげ、治の顔をうかがうと、潤んだ目で見返してきます。

僕はそれを軽く前後にしごきながら外に引き出し、今度は、指に力を入れて激しく上下に動かしてみまし

た。

治は、キスしていた口をちよつと離し、小さくあえぎ声をあげました。

僕は上半身を屈めるようにして、治の股間に顔を埋めていきました。

ペニスのあらゆる部分に、赤い口紅を塗った唇でキスの雨をふらせませます。

そのたびに、治は、腰を浮かすようにします。僕に

はそれが、なんだかすぐくいいじらしく感じられました。

だんだん我慢できなくなってきた治は、早くくわえてくれと言わんばかりに、僕の頭をわしづかみにし、その指に力を込めてきます。

僕は、亀頭にキスしながら、ゆっくりとそれを口にふくんでいきました。

治の吐く息が、僕の首筋に絶え間なくかかっていた。した。

僕はこの前の時より丁寧に、じらしながらそれをせめていきました。舌の先を使って、亀頭の裏側を刺激すると、治は上半身をそらし、声をあげました。

やがて治は耐えられなくなり、手で持った僕の頭を押さえ、上下運動を無理強いしはじめました。僕はもう、それに任せるしかありません。

治はその動きに合わせて腰を突き出してくるので、僕は何度も、吐きそうなほど苦しい思いをしました。

でも、その苦しさを少しも嫌だとは思いませんでした。治のせつなさを僕の苦しさであがなっているような気がして、そう感じると、その苦しさが喜びのようにも思えてくるのでした。

その動きが極限に達し、僕が窒息しそうになったとき、治の「男」から熱いものがほとばしりました。僕はそれを、こぼさずに呑み干そうとしました。

そしてその瞬間、驚いたことに、僕のベビードール

のシヨーツの中でもそれが爆発したのです。

僕と治は、一言も会話を交わすことなく、ふたりそろって絶えていました。

十六年間、お互いを全面的に受け入れたいと願いながら、それを裏切り続けてきた僕たちには、それでじゆうぶんだったのかもしれない。

その夜、僕は、黒いブラジャーとパンティという姿で、治の太い腕に抱かれて寝ました。

翌土曜の朝、補講があるとかで大学へ行く治に、僕は、「ちよつと考えがあるから、夜になってから帰ってきて」と言いました。

そして、その後、街へ買い物に出たのです。

デパートで、高級な女性下着や、前日買ったのよりずっと上等な化粧品類を買い、ブティックをまわって、衣類やアクセサリを買い揃えました。

以前だったら、そんなものを買うなど、恥ずかしくてできなかったにちがいありません。でも、その日は恥ずかしいともなんとも感じませんでした。

仕事で担当しているクライアントが婦人もののメー

カーばかりだったので、商品知識はありました。おかげであまり迷うこともなく、昼過ぎにはほとんどの買い物が終わっていました。

帰りに、近所の家具屋へ寄って、鏡台を注文しました。

翌月のクレジットカードの支払日には預金残高がゼロになることを覚悟の上の、大散財です。

マンションに帰りつき、鏡台を届けに来た家具屋が

戻って行ったときには、三時を少しまわっていました。

浴槽にたっぷりとお湯をため、買ってきた脱毛クリームを体じゆうに塗りこんだ後、バスを使いました。

もともと薄かった体毛がすっかり抜けた僕の脚は、自分でも信じられないくらいすらりとしてきれいに見えました。

風呂から上がると、バスローブのまま、真新しい鏡台の前に座り、メイクしました。

マニキュアやペディキュアまで含め、熱中し、時間をかけてやったので、終わった頃には外が暗くなっていました。

前日の「コンビニ・コスメ」と比べると、色も「のり」も格段の差で、表現力が豊かな分、凝ってしまっただせいもあります。

僕は急いで下着と服を着ました。

パッドを入れて膨らませた八〇センチBカップのブ

ラ、レースぶかいのかわいいキヤミソールと揃いのペ
チコート、明るいオレンジ色のワンピース、そして最
後に、軽くカールしたロングヘアのウイツグとカチュ
ーシャ。

鏡の中には、どう見ても女子大生としか見えない「女
の子」がいました。

僕はそれから、白いサロンエプロンをつけて夕食の
準備にかかりました。

知っている限りの料理の知識を総動員し、フランス料理ふうに肉を煮込んだり、スープをつくったりしたのです。

テーブルの上に二人分の料理を並べ、ワイングラスを置いたとき、ちょうど治が帰ってきました。

ダイニングに入ってくるなり、治はあんぐりと口をあけて、僕の方を見ていました。

僕は、ちよつと首を傾けるようにして、自分が最も

かわいらしく見えると思う仕草で言いました。

「プレゼント……よ」

「……」

治は、僕の言ったことなどまるで耳に入っていない様子で、僕を見つめていました。

「治ちゃん。僕……じゃない……わね、あたし、治ちゃん
の恋人になろうと思う……の」

「……恋人？」

恋人という言葉に、治ははじめて我に帰ったように聞き返してきました。

「そう。治ちゃんといるときは、できるだけこんなふうにしてようって……。あたし、治ちゃんの恋人になる、わ。いっしょに街を歩いたり、映画を見たり、お茶を飲んだり、そんなことも、してみたいの」

治は、僕の言っていることの意味が、やっと少し飲み込めたようでした。

「……もし、治ちゃんが、あたしでよければ、だけど」
「い、いや、俺、兄貴みたいにきれいな子なら……だ
けど、変な具合だな」

「うふ。じゃ、このプレゼント、もらってくれる……
かしら？」

「うん……そりゃ……」

「それなら、とりあえず、乾杯……しましよ。すわっ
て」

「あ……ああ」

治が座ると、僕はロゼのワインをふたつのグラスに注ぎました。

「治ちゃんの、新しい恋人に」

僕がグラスを差し出すと、治も自分のグラスをそれに重ねました。カチンと澄んだ音が部屋に響きました。

「で、でも兄貴……」

「ねえ、お願い」

「え？」

「あたしがいつししょうけんめい、慣れない女言葉使ってるんだから、その兄貴っていう呼び方、やめて」

「：：ああ、うん。：：でも、なんて呼べばいいんだろう？」

「そお、ね：：本名が秀夫だから、秀美っていうのはどう？」

「ひでみ？ 兄貴に向かって秀美なんて、俺、照れる

よ」

「そう？……かわいい名前だと思うんだけど……そう
だ。治ちゃんがその呼び方に慣れるように、あたしが、
あたし自身のことを言うときも『秀美』って言えばい
い、のよね。女の子ってよくそうするでしょ。じゃ、
……秀美は、これから自分のことを、秀美って呼ぶ、
わ。……で、秀美が、どうかして？」

「う、うん。俺は、ひ……秀美みたいな子が形の上

だけでも、恋人になつてくれるならうれしいけど、兄
：：秀美の方は、それでいいのかな、って」

「これは、秀美が望んでやってることなのよ。秀美は、
治ちゃんが喜んでくれることが何よりうれしいの。そ
れに、秀美が治ちゃん恋人になるっていうのは、形
の上だけじゃない、わ。：：ちよつと、恥ずかしいけ
ど：：言つちやおかな。：：秀美、ゆうべみたいなき
と、もつとしたいの。秀美は治ちゃんのことを誰より

大好き。ゆうべ、それがよくわかったの」

治は僕の方をじっと見つめ、ごくんと唾を飲み込むような仕草をしました。

「……秀美のこと、軽蔑した？」

僕がうつむいて、上目づかいに見ながら言うと、治は強く首をふりました。

「よかった。……でもね、気をつけた方がいいわよ。

秀美、治ちゃんの前だと、ものすごくわがままな女の

子になりそう。それでもいい？」

「ああ、その方がいいよ」

治は笑いながらもきっぱりとそう言つて、ワインを一気に飲み干しました。

僕は、テーブルの上に両肘をつき、からめた指の上に顎をのせて、その男っぽい飲みっぷりを見ていました。治はグラスを置くと、ちよつと照れくさそうに、そんな僕を見返してきました。

「……秀美、きれいだよ。それに、すごくかわいい」
「うれしいわ。……キス、して」

僕が目をつぶってテーブルごしに唇をつき出すと、
治は唇の傷のない側で、ちゅつと音を立てて触れてき
ました。

自分がとんでもなく異常なことをしているんだと、
じゅうぶん承知の上で、僕はその心理ゲームを本気で
楽しんでいました。たとえどんなかたちであるにせよ、

治に愛されていると実感できることは心地よいことでした。それに、女言葉は恥ずかしくても、それを使うことで、治に対して、何の屈託もなくものが言えるのです。それは僕にとって、うれしい発見でした。

その夜、僕は、白いネグリジェに身を包んで治に抱かれました。

そして、あの部分に、生まれて初めて外からの侵入

を受けたのたです。

治の太いペニスを受け入れ、僕は、自分の体がバラバラになってしまおうのではないかと思うほどの痛みを味わいました。でも、その痛みが大きければ大きいほど、治の心の痛みを分かち合っているような気がして、僕の体は、自分でも驚くほど大胆に、悦びの反応を示すのでした。

治の精液が、どくどくと腹の中に注ぎ込まれるのを

感じたときには、その悦びが、僕の体のいちばん深いところから発しているのだと、自然に感じとることができました。

僕は、治の太い腕の中で守られるように眠りながら、治のために、もつともつときれいになりたいと思いました。

9

その日から、治の性格は、以前恋人とつきあってい
たとき以上に、明るく積極的になっていきました。

そして、種を明かせば、それには、僕自身がそう演

出していた部分も少なからずあるのです。

僕と治は、休日になるとかならずデートしました。

新宿、渋谷、六本木、：：、できるだけ人の多いところを選んで、二人で歩きまわりました。

最初、女装での外出はちよつと恥ずかしかったのですが、しばらくすると苦にならなくなっていました。

いえ、女として「見られるよろこび」さえ感じるようになってきました。おしやれな服に身を包み、ハイヒール

ルをはき、治の太い腕につかまって街を歩く。それはぞくぞくするような快感でした。

僕は、街行く人たちの前で、これ見よがしに治に甘えました。横断歩道の人波の中で、キスをねだったことすらあります。治を信頼し、自分の身をすべてゆだねているのだという姿を人に見せつけたかったのです。

人々は、そんな僕たちを、最初一様に奇異な目で見

ます。

なんでこんな美人が、こんな男といっしょにいるんだ？

そういう視線です。

でも、治に甘えきった僕のそぶりを見ると、治へのさげすみの目つきは、やがて畏敬の視線へと逆転するのでした。

この顔でこんな女をものにするなんて、この男、き

つと大した奴にちがいない……。

それが、治に自信をつけさせました。

かつて、人の目のあるところでは、おどおどした態度だった治が、堂々と街中を歩くようになったのです。

僕はそんな治を見るのが、とてもうれしかったのです。

だから、家にいるときも、可能な限り「秀美」になっ
ていました。

会社から帰るとすぐに女装し、夜は治のベッドで眠り、朝、出勤する時、やつと男に戻る。そんな毎日でした。

会社で仕事をしているときも、「早く秀美になりたい」と、そんなことばかり考えていました。当然、仕事にも熱が入りません。定時になるとそわそわしだし、できるだけ早く仕事を切り上げて社を出ました。その結果として、僕の評価は下がり、重要な仕事からは、

だんだん外されていきました。

僕は、それでもいいと思っていました。僕には、広告をつくるより「ひとりの女の子」をつくり出す方が、ずっと創造的だと感じられたのでした。

当然、恵美子ともほとんど会わなくなりました。恵美子が来そうな撮影現場は避けていましたし、会社に電話があっても、「手が離せないから」と出ないことが多かったのです。マンションの電話は、室内にいる

ときでも、いつも留守番電話にしてありました。

そんな秋の、ある日曜の夕方でした。

僕は、その日のデートで買って来たばかりの真っ赤なミニスカートをはいて、キッチンに立っていました。

「秀美の手料理が食べたいな」という治の意見で、
外食はやめて、家で作ることにしたのです。

鼻歌まじりに僕がてんぷらの材料を切っていると、

どういうわけか、奥の部屋からなまめかしい女のあえぎ声が聞こえてきました。

「……？」

僕はちよつと手を止めましたが、それが何なのかすぐわかりました。

「もお！　治ちゃんったら。エツチなビデオばかり見てないで、すこしは秀美のこと、手伝ってよ」

僕が怒った声で言うと、テレビを切った治がダイニ

ングに出てきました。

「男って、ほんとにやらしいんだから」

玉ねぎの皮を剥きながら、すねてみせます。もうその頃には、女装しているときは「秀美」になりきっていましたから、半分以上は本音です。

「秀美、妬いてるのか？」

治は僕の体を後ろから抱くようにして、面白そうにからかいます。

「そんなんじゃないわ。だけど、秀美のことほつとい
て、ひとりで、こんなにしてるんだもん」

包丁を置いた僕は、治のズボンの前の部分に触れな
がら言いました。

「馬鹿だなあ、今夜、秀美をどんなふうにかわいがつ
てやろうかって、研究してたんじゃないか」

治は僕の耳に息を吹きかけるようにして言って、ス
カートの下から、後ろの大事な部分に触ってきました。

「ああん……エツチ……」

僕はもう、それだけでせつなくなつて、治にしなだれかかります。僕の体は、毎晩、治に「開発」され、とても感じやすくなっていました。

治は、僕を抱きかかえるようにして、キスしてきました。僕は、料理のことなどすっかり忘れて、治に甘えながら、ズボンの前にかけて手を揉むように動かします。

「……うふ。さつきより、ずっと大きくなってきた」
「そりやそうさ。AVギャルなんかより、秀美の方が
ずっとおいしいもんな」

「じゃ、……秀美を、食べて」

僕は、両手を治の首にまわし、ぶら下がるようにし
てキスをせがみます。

治は、僕のスカートの後ろをまくり上げ、ショーツ
の上からお尻を揉みしだくようにします。僕の腰は自

然に、くねるように動いてしまします……。

その時、チャイムが鳴りました。

僕はもつと続けてほしかつたのに、治は体を離し、
玄関へ出て行きました。

「宅急便です」

印鑑を取りに戻ってきた治に、僕は「イーツ」をしてやりました。

治が抱えてきて床に置いた段ボール箱は、郷里の母

からのものでした。開けると、中にはたくさんの梨と、一通の手紙が入っていました。

「……母さん、心配してるみたい。二人とも、夏休み、帰らなかったものね」

僕が手紙を読みながらそう言うと、食卓の椅子に座って煙草をふかしていた治が、面倒臭そうに答えました。

「ずっとバイトがあるからって、言つといたんだけど

な」

「やっぱり一度ぐらい、帰ればよかったのよ。秀美は
そうしようって言ったのに」

「わかってるだろ。秀美と離れたくなかったんだ。た
とえいっしよに帰ったって、秀美は秀美のままでは
られないわけだし。秀美が女装したままで帰れるんな
ら、俺だって帰ったよ」

「そんなこと、できるわけないでしょ」

「だろ」

「……そうよね。あたしたち、親には絶対言えないよ
うなこと、やってるのよね」

「……うん」

「これからどうなるんだろう、あたしたち」

僕は、手紙をテーブルに置きながら言いました。その頃、毎日をそんなふうにご過ごしながらも、漠然とした不安を抱き始めていたのです。

「……俺は、秀美と別れるのは絶対にいやだからな」
治はそう言つて、煙草を灰皿に押しつけました。僕
には、そんな子供っぽい言い方で自己主張する治がと
ても好ましく思えましたが、親にさとらせないために
も、あまり心配はかけない方がいいだろうと思いまし
た。

「とにかく、治ちゃんだけでも、一度帰った方がいい
と思うわ。父さんもなんだか体調良くないって、書い

てあるし……」

僕はちよつとかがみこみ、段ボール箱の中の梨を取り出そうとしました。

「秀美、そのミニスカート、すごく色っぽいぞ」

僕の真後ろにいる治からは、スカートの中が見えていたのでしょう。

「……またあ」

あわてて片手で後ろを押さえようとしたが、そ

れより早く、治の両手が僕のお尻をつかみました。

「さっきのつづき」

「ダメ。これ、冷蔵庫にしまおうと思ったのに」

僕は、そう言いながらも、手にとった梨を箱の中に戻していました。

「ほら、欲しくてしょうがないくせに」

治の大きな掌でそこをつかむように揉まれて、上体を起こそうとした僕は、思わずよろけてテーブルに手

をついていました。

「もお：：馬鹿」

治が僕の腰をつかんで引いたため、僕はテーブルに両肘をつき、治に向かって、お尻を突き出すような形をとらされていました。

治は、僕のショーツを膝のあたりまでずり下げると、つづいて自分のファスナーをおろしました。

「ここで、するの？」

「だめか？」

「こんなかつこ、恥ずかしいわ」

「だから、いいんじゃないか」

すでにいきり立っている治のペニスが、僕の腰に触れ、這いずるようにあちこちを動きました。治が、それを擦りつけるようにしているのです。

「……ああ」

「秀美の尻、このごろ、すごく感度がいいな」

「……意地悪」

治は、僕の腰を持ち上げるようにして、今度は秘部のあたりをせめてきます。太く、堅くなったペニスの先が、柔らかくて敏感なその部分を何度も往復しました。先からはすでに、ねばねばした液が出はじめているらしく、そのせいで、僕のそこが濡れてくるのがわかりました。

僕は、テーブルの上の自分の腕に頬をこすりつける

ようにして、全身をくねらせていました。

「……もう……だめ。がまんできない。早く……」

僕が甘え声で言うと、治のそれが、僕の秘部にめり込み、入ってきます。

「……ああ……」

治の腰がゆつくりとピストン運動を始めます。

身長の高い治の「位置」に合わせてようとすると、僕はどうしても爪先立ちしなければなりません。まるで

バレリーナのような立ち方で体を支えていると、ふくらはぎから足首までがつつたように痺れてきます。その苦痛と下腹にうごめく異物感が、僕の下半身をじーんと熱くしていききました。

治の前後運動がしだいに激しくなります。不安定な体勢の中で、僕も必死にそれに応えようと、腰を振ります。

「……お願い。秀美のも……持ってて」

治が太い腕で僕の腰を抱きかかえるようにしました。そして、治のと比べればずっと貧弱ながら、やはり勃起した僕のを握ってください。

「ああ：：いい」

「秀美、絞めてくれ」

治が言いました。僕は、下半身を突っ張るようにして、お尻を絞めます。

「秀美、いいよ。最高だ」

治は、そう言つて、強烈に腰を突き出しました。

「あつ」

僕の体の中を脳天まで突き抜けるように、苦痛とも快感ともつかないものが走ります。僕の意識はだんだん空白になっていきます。

「秀美、好きだよ」

「あたしも……愛してる」

治の腰の動きがさらに激しくなりました。

「……いきそうだ」

「いいわ……来て」

その時また、チャイムの音が聞こえたような気がしました。

(……治ちゃん、さつき、ちゃんと鍵をかけたかしら?)

そんな意識がちらりと頭をかすめました。また治が激しく突き上げてきたせいで、次の瞬間には、僕は

すべてを忘れていました。

「……ああ、死ぬ……」

治の腰が連続して激しく動きます。そのたびに僕の体の中に熱いものが流れ込んでくるのがわかりました。

治の掌の中でも、いじらしく突っ張った僕のもものがそれを出していました。

「……あ、あー」

体から力が抜け、昇りつめたものが急速に落下して
いくような感覚がありました。

僕は、テーブルの上に腕を伸ばし、冷たいその表面
に頬をじかにあて、大きく息を吐きました。

その時、治の体が急にびくりと硬直したのがわかり
ました。

そして、まだ僕の体の中に差し入れたままのそれが、
急速に萎みました。

「……？」

その感覚が、いつもとまるでちがったので、なんだか異常なものを感じて、僕は顔を上げました。

と……。

テーブルを挟んだむこう側に、第三の人物が立っていたのです。

恵美子でした。

恵美子は、目と口を大きく開けたまま、身じろぎも

せずにこちらを見つめていました。

僕と治もまた、予期せぬちん入者に、その体勢のまま体を固くしていました。

僕の腰にまわした治の掌から、そして、ミニスカートの股間から、精液だけがぽたぽたと落ちていました。そんな二対一のにらみ合いがどのくらい続いたでしょう。

バッグを握りしめた恵美子の両手が激しく震えだし

ました。

「……け、ケダモノ！」

恵美子は、吐き捨てるように言うと、部屋を飛び出して行きました。

噂は、あつという間に広がりました。そもそも噂好き
きな業界である上に、僕の裏切りを根に持った恵美子
が、あちこちで言い触らしているようでした。

広告代理店というのは、一見自由そうに見えても、自分の評判だけはやたら気にする連中の集まっているところですよ。みんなが、僕のことをそれとなく避けるようになっていきました。

当然、仕事がうまくいくわけはありません。それにだいいち、僕自身が仕事に対する熱を完全に失ってしまいました。

会社は給料を貰うために行くのだと割り切ろうと思

つていましたが、そんな状況の中に毎日いるのは、やはり苦痛でした。

そして、一度だけ、そんなことを治にこぼしたことがありました。治は、黙って何か考え込んでいるようでした。

翌日、僕が会社から帰ると、玄関に出てきた治がいきなり「俺、大学、中退したから」と言いました。

僕が驚いて聞き返そうとすると、続けて「ついでに、

仕事も決めてきたんだ」と言ったのです。

「何でそんなことを……」

「これからは、俺が働くよ。秀美は会社辞めて、家にいろよ」

「よくないよ、そんなこと」

男の格好のままの時は、なんだか中途半端な言葉づかいになります。

「俺、男として秀美につらい思いさせたくないんだ。

それに俺、秀美がそんなふう背広とネクタイ着てるのって、見るのイヤなんだ。秀美は、俺の『女』でいて欲しい」

「だけど、大学やめるなんて……」

「いいんだ。秀美みたいに一流大学ってわけじゃないし」

「でも……」

僕は、僕のために治が自分の人生を犠牲にしてしま

ったようで、ショックでした。そして、一方で、そこ
まで僕のことを思ってくれていることが、うれしくも
ありました。

「なあ、秀美。もし、秀美さえよければだけど……、
恋人としてじゃなく、ましてや兄弟なんかじゃなく、
いっしよに暮らしてくれないか。夫と、妻として……」

「……治、ちゃん」

僕は、自分がまだ男姿のままであることをすら忘れて、

治の胸に飛び込んでいました。

何日間か迷いましたが、けっきょく僕は会社に辞表を提出しました。

それと時を同じくして、治は、入社した会社の研修に出かけて行きました。

治が入ったのは、高給だけれど仕事がハードなこと
で有名なある運送会社でした。治は、その大型ドラ

イバーとして雇われたのです。一か月も合宿研修を行うのは、大型免許取得も兼ねているからだ、というこ
とでした。

治が留守の間に、僕は治に内緒で、退職金のほとん
どを使ってあることをしました。

体の整形です。

広告で見た形成外科をたずね「女になりたい」とい
きなり言ってみました。

医者は、僕のなりを見て、それだけで納得したようでした。

「うちでできることは豊胸と、それにホーデンの摘出だけだよ。ペニスの切除とか造脘は、勘弁してほしい。それから、手術したらもう、元には戻れないけれど、それでもいいんだね？」

僕は、すぐさまうなずいていました。

最初は、三日に一度、女性ホルモンの注射をしても

らいに通いました。

よほどよく効く注射だったらしく、僕の体は日に日に変化していきました。体全体が、丸みを帯び、筋肉が柔らかくなつて、そして、小さいながら胸もふくらんできました。

二週間後、その変化を診た医者から、入院するよう
に言われました。

入院するとすぐ、辜丸の摘出手術を受けました。手

術後二日ほど高熱が出ましたが、その後は経過が順調で、邪魔するものがなくなった女性ホルモンは以前にも増して効くようになりました。一週間後には、僕の乳房は、もうAカップ程度にはなっていました。

豊胸手術は、想像していたのよりずっと簡単でした。脇の下のあたりに切れ目を入れ、そこからシリコンバッグを挿入する。手術の四日後には傷も癒え、退院を許されていました。

マンションへ帰り、初めてパッドなしでブラジャーを着けたときは、直接触れるそのレースの肌触りに感動して涙ぐんでしまったことを覚えています。

三日後、治が帰ってきました。

「お帰りなさい。さみしかったわ」

玄関に迎えに出た僕は、すぐその首に抱きつき、キスしました。

治も、まるで飢えた野犬のような乱暴さで僕を抱きしめてきました。

抱かれながら、僕は、治の手をとって、サマーセーダーの胸の部分に押しあてました。

「……？」

やはり手触りがパッドとはちがったのでしよう。治

が訝しげな表情をしました。

「うふ。：：手術、しちやった」

「：：えっ？」

治は驚いたように、僕の顔を見ていました。

「早く：：見てほしいの。脱がせて」

僕がそう言うと、治はいきなり横抱きに僕を抱え、そのままベッドルームまで運びました。

その抱え方があまりに軽々々という感じなのに、僕

はちよつと驚きました。

一か月におよぶ研修で、治が前にも増してたくましくなっていたせいもありましたし、一方で「ホルモンは用心しないと太る」と聞いた僕が、ダイエットに努めていたせいでもありました。

僕は：：私は、こんなに軽いんだ。

——このときから、私の意識は、完全に「僕」を捨てたのだと思います。

治は、私をベッドの上に放り投げるように寝かせる
とすぐ、サマーセーターをまくり上げ、脱がせました。

そして、私の背中に腕をまわし、ブラジャーのホックを外します。私は、腕を上にはさしあげて、治がそれを抜き取るのに協力しました。

たわわに実った二つの乳房が現れると、治は私の体の上に四つんばいにかぶさるようにしてそれを見ていました。

「どお？：：：きれい？」

私は伸ばしはじめた自毛を掻きあげるようにして言いました。

治は私の胸を見つめたまま、ゆっくりとうなずきました。

「治ちゃんのものよ」

私が言うと、治は、そこに顔を埋め、頬ずりしてききました。

髭の剃り残しが、ちくちくしてちよつと痛かったのを覚えています。

「吸ってみて」

治は、私の左の乳首をくわえ、吸いはじめました。

最初は、ちよつとくすぐったかったです。左、右、左、：：と何度も吸われているうちに、それが快感に変わっていききました。

治は、乳首を吸いながら、乳房に手を添え、強く揉

みしだきます。

（胸があるって、こんなに素敵なことだったのね）

私は、治にされるままに、ベッドの上で体をくねらせ、そう思いました。

「ねえ、治ちゃん。秀美、前からしてみたかったことがあるの。脱いで」

胸への愛撫をじゅうぶんに堪能したあと、私は言い
ました。

「なんだよ」

「いいから、早く」

私の言葉に、ベッドから降りた治は、シャツとズボンを脱ぎ捨てました。

その肌は前にも増して日焼けし、胸板が厚くなっているように見えました。

私は、治の前に膝まづき、トランクスを降ろしていきます。目の前にたくましく峻立するそれが現れまし

た。

私は自分の胸を両側から持ち上げるようにして、その谷間にそれを挟み込みました。白い乳房の間で、赤黒く張りつめたその肉棒が、よく鍛えられた鋼のように動いています。

私は、膝と腰を屈伸させ、乳房でそれを摩擦します。

「秀美……すごいよ」

治がうわずった声で言いました。治のペニスの先か

ら出るねばねばした液体が、私の胸を濡らします。

「ああ、もうがまんできかないよ」

治は強い力で、私の体を引き上げると、そのままベツドの上に押し倒し、おおいかぶさってきました。

強い力で抱きしめられ、その厚い胸板に私のふたつのふくらみが押しつぶされます。私は思わず両腕と両脚を治の体にまわし、しがみついていた。いました。

「あ・な・た、：：愛してるわ」

翌日から、私の「妻」としての生活が始まりました。

治は東京と関西間の長距離に乗っていましたので、

昼過ぎに出勤し、その日は帰らずに、翌日の夜帰宅す

るといふ具合でした。三日目が休みになるといふ、二勤一休の勤務シフトです。

治が帰らない夜は、さみしくて仕方がありません。以前はそんなことはなかったのに、夜一人でいるとき、部屋の外に足音が聞こえたりすると「こわい」と思うようにさえなりました。

そのさみしさを紛らすために、私は、料理の勉強をしたり、編み物の本を買ってきて、治のために手編み

のセーターを編んだりしました。

私が今、主婦としてやっていたのは、この時期があつたからです。

さみしい思いをしていたぶん、治が家にいる間は、治につくし、そして、甘えました。

不思議なことに、男だった時持っていた野心や、世の中への好奇心などは、すっかりなくなってしまうした。

私には、ただ治だけ。それでじゅうぶんでした。

幼い頃のあの事件以来、ずっと感じていた「生きて
いることの後ろめたさ」のようなものからすっかり解
放された私の心は、やっと平穏な居場所を見つけたの
です。

そんな生活を送っていることはもちろんのこと、私
が退職したことも、治が中退して働きはじめたことも、

両親には知らせずにいました。二人とも「忙しい」とを口実に、正月にも郷里には帰らず、一年以上、二人だけの「秘密の生活」を続けていたのです。

こんな状態をいつまでも続けているわけにはいかない。それはわかっていたのですが、こんなことを親に納得させる自信など私にはありませんでした。

そして、そういうするうち、年も代わり、梅雨の季節になっていました。

そんなある雨のそぼ降る朝、電話が鳴りました。

その日、治は明け番だったので、私たちはベッドで抱き合って寝ていました。電話の音がいつまでも続くので、しかたなく治が起き出しました。

私は夢うつつで、治の声を聞いていました。そして、その声が尋常ではない響きに変わっていくのに気づき、無意識のうちにピンクのネグリジェを着た半身を

起こしました。

治が蒼白な顔で、もと私の部屋だった二人の寢室に戻ってきました。

「親父が倒れた。どうやら危ないらしい」

治の口がそう動くのを、私は愕然と見つめました。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

アンダー・ザ・ウィーピング・ウィロー

Under The Weeping Willow

<公開版>

CopyRight 1991 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500